



Title	自己調整学習に関わる要因に関する研究 - 自己受容及び性格特性の観点からの分析 -
Author(s)	原田, 純治; 目野, 美幸
Citation	長崎大学教育学部紀要, 4, p.95-101; 2018
Issue Date	2018-02-28
URL	http://hdl.handle.net/10069/38123
Right	

This document is downloaded at: 2019-06-16T08:54:27Z

人見知りに関わる要因に関する研究

－出生順位及び親和動機の観点からの分析－

原 田 純 治¹・前 里 美乃莉²

A Study of Shyness: From the Point of View of Birth Order and Affiliative Motive

Junji HARADA Minori MAESATO

目 的

さまざまな人と関わり、連携しながら生きていくことを求められる社会で、コミュニケーション能力は重要である。学校教育においても、表現力は育むべきものの一つとして挙げられている。しかし、コミュニケーション能力に自信がある人はどれだけいるのだろうか。文化庁が行った平成23年度「国語に関する世論調査」では、初対面の人とのコミュニケーションが「得意である」「どちらかと言えば得意である」と回答した人は合わせて42.9%、「どちらかと言えば苦手である」「苦手である」と回答した人は合わせて55.5%であった。初対面の人とのコミュニケーションが苦手な人が、得意であるという人を上回る結果であった。日常、自己紹介をする際に「人見知り」という言葉を用い、コミュニケーションを苦手とすることを表明する人が多いように思われる。

「人見知り」とは具体的にどのような意味を内包しているのだろうか。元来、人見知りという言葉は、「子供などが見慣れない人に対して不安を感じたり、恥ずかしがったりすること」（大辞林より）を意味する。その用法が広がり、成人のコミュニケーションや人付き合いが苦手である性質を示す意味で使用されている。小此木（1980）は、人見知りについて次のような基本問題が前提にあることを指摘している。「子どもの人見知りについては、その現象が具体的に観察できるが、大人の場合には分化した一つの心理体験として意味的なものと関連づけてはじめて具体的に追体験されうるようなものであること。人見知りは正常心理であるが同時に病的なものにも連なっていて、人見知りの見地から様々な症状を理解する試みが可能であること。この二つの事実から、人見知りは“甘え”と同じように現象的なものと意味的なもの、記述的なものと力動的なもの、正常なものと病的なもの、両者を結ぶ概念となりうるとともに共に、それだけに区別が曖昧でその意味は多義的となり、説明されるものと説明するものが混線するといった錯綜が起りがちであること。」

この多義的で曖昧な「人見知り」という性質の意味を、人々はどのように構造化してとらえているのだろうか。そこで、本研究では「人見知り」という性質をどのような次元から捉えているかを明らかにし尺度の作成を試みる。さらに、その尺度を用いて人見知りと親

¹ 長崎大学教育学部

² 長崎大学教育学部平成28年度卒業生

和動機と出生順位との関連性について検討する。

親和動機とは、他者と友好的になり、その関係を維持しようとする欲求のことである。杉浦（2000）の尺度によれば、親和動機は他者からの拒否を恐れる「拒否不安」と拒否に対する不安や恐れなしに人と一緒にいたいと考える「親和傾向」の2つの要素から構成されていると捉えられる。拒否を恐れるゆえの親和性と人とともにありたい親和性は、相反する2つの側面のように解釈されるが、「人見知り」とはいずれも関連すると考えられる。

本研究では、「人見知り」な人は、人付き合いは苦手だが他者への興味は強いと予想する。彼らは、対人関係に興味はあるが、同時に周囲からの評価懸念を抱く両価的な認知を持っていると予想する。

出生順位に関しては、長子は次子が誕生するまでの間は一人っ子であり、同世代同士のコミュニケーションや対人的相互作用は限られる。具体的なモデルとなる存在がいないまま過ごす時期が存在する。中間子や末子は、コミュニケーションの相手は長子に比べて多く、長子の人付き合いや経験を見て学ぶことができる。そのような環境のちがいが人見知りという性質に影響を及ぼしているのではないかと考えられる。

以上のことから、人見知りと出生順位及び親和動機の関連性について以下のような仮説を設定し検証を試みる。

仮説1 「人見知り」な人は、拒否不安、親和傾向ともに高いだろう。

仮説2 中間子や末子に比べ、長子は人見知りの傾向が強いだろう。

方 法

予備調査

目的

人見知りの程度を測定する尺度を作成するため、項目を収集し、選定することにあつた。

調査協力者

大学4年生50名。

調査期間

平成28年11月上旬。

手続き

「人見知り」な人物からイメージされる、その人の行動や特徴の記述を求めた。回答の所要時間は5～10分程度であった。述べ113個の「人見知り」な人物の特徴に関する項目が得られた。内容分析により32項目から成る「人見知り尺度」を作成した。

本調査

調査協力者

大学生3年生～4年生103名（男性5名、女性98名）。

調査期間

平成28年12月中旬。

実施方法

講義の時間に質問紙を配布し、回答の後その場で回収した。回答の所要時間は10～

15分程度であった。

質問紙の内容

- (1) 年齢と性別。
- (2) 出生順位。
- (3) 親和動機尺度

杉浦 (2000) の親和動機尺度の2つの下位尺度の「拒否不安 (仲間から浮いているように見られたくない, など9項目)」、「親和傾向 (人とつきあうのが好きだ, など8項目)」を用いた。それぞれの項目について「あてはまる (5点)」「ややあてはまる (4点)」「どちらともいえない (3点)」「あまりあてはまらない (2点)」「あてはまらない (1点)」の5件法で回答を求めた。

- (4) 人見知り尺度

予備調査で得られた32項目から成る尺度を用いた。それぞれの項目が回答者の普段の行動や考え方にあてはまると思うか否かについて「そう思う (5点)」「まあそう思う (4点)」「どちらともいえない (3点)」「あまりそう思わない (2点)」「そう思わない (1点)」の5件法で回答を求めた。

結 果

人見知り尺度の因子構造

予備調査により得られた32項目への回答を基に因子分析 (最尤法, プロマックス回転) を行ったところ, 4因子が抽出された (Table 1)。第1因子の「初対面の人と話すのは苦にならない (逆転項目)」「初対面の人とはぎこちなくなってしまう」などの項目は, 対人関係を形成あるいは開始することの苦手さを示す内容であることから「関係開始の困難さ」と命名した。第2因子は, 「おとなしそうだとよく言われる」「自分の考えや意見を言うことが苦手である」など, 人前での発言を躊躇する内容の項目が含まれることから「発言への消極的姿勢」と命名した。第3因子は, 「緊張しやすい」「すぐ不安を感じてしまう」など人前での不安や緊張を示す内容の項目から構成されているため「人前での不安・緊張」と命名した。第4因子の「親しい人だけの場だと口数が多くなる」「仲良くなると口数が多くなる」の2つの項目は, 一旦打ち解けた関係になると口数が多くなるという内容であるため「親しい関係内に限定される会話」と命名した。

Table 1 人見知り尺度に関する因子分析結果 (最尤法, プロマックス回転)

質問項目	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子
第1因子: 関係開始の困難さ($\alpha=.846$)				
20 * 初対面の人と話すのは苦にならない	.80	-.23	.07	.03
3 初対面の人とはぎこちなくなってしまう	.72	.03	-.05	.12
21 コミュニケーションをとるのが苦手である	.65	.17	-.03	-.06
2 相手が話しかけてくるのを待つことが多い	.64	.27	-.08	.08
9 知り合って2回目以降会った時声をかけるのをためらう	.60	.15	-.09	.17
19 初対面の人ばかりの場はストレスに感じる	.54	-.24	.20	.22
5 * 人とすぐ仲良くなれる	.53	.09	-.12	-.08
16 * 大人数の場では、なんだかうきうきする	.46	-.10	.09	-.16
1 人とあまり目が合わないようにする	.42	.07	.09	-.02
第2因子: 発言への消極的姿勢($\alpha=.836$)				
14 おとなしそうだとよく言われる	-.01	.70	-.23	.06
6 声が小さいとよく言われる	-.06	.70	.22	-.12
8 * 大人数で話しているときはよく発言する方だ	-.16	.66	.06	.13
29 自分の考えや意見を言うことが苦手である	.06	.63	.16	.00
13 3人以上いると発言しなくなる	.13	.60	-.03	-.06
10 話しかけられたとき上手く言葉が出ずにどもってしまう	.35	.47	-.09	-.05
28 慎重な性格である	.02	.47	.16	.21
26 口下手である	.08	.44	.03	.22
第3因子: 人前での不安・緊張($\alpha=.763$)				
22 人前で話すのが苦手である	.10	.01	.75	-.02
17 緊張しやすい	.01	-.05	.70	.29
23 注目されるのが苦手ですできるだけ目立ちたくない	.19	.16	.56	-.23
30 すぐに不安を感じてしまう	.11	.05	.41	.15
第4因子: 親しい関係内に限定される会話($\alpha=.675$)				
15 親しい人だけの場だと口数が多くなる	-.10	.12	.10	.77
31 仲良くなると口数が多くなる	.09	-.16	.06	.59

(注) *は逆転項目

人見知り因子と親和動機との関連

人見知りに関する4つの因子(関係開始の困難さ, 発言への消極的姿勢, 人前での不安・緊張, 及び親しい関係内に限定される会話)のそれぞれを目的変数, 親和動機の「拒否不安」と「親和傾向」を説明変数とする重回帰分析を行った。結果は, Table 2に示す。結果, 人見知り因子の「親しい関係内に限定される会話」と親和動機の「拒否不安」「親和傾向」との間には関連は見出されなかったが, 拒否不安が高い者ほど, また親和傾向が低い者ほどより「関係開始の困難さ」「発言への消極的姿勢」そして「人前での不安・緊張」が高いことが見出された。

Table 2 人見知り因子と親和動機との関連性 (標準偏回帰係数)

親和動機	人見知り因子			
	I 関係開始の 困難さ	II 発言への 消極的姿勢	III 人前での 不安・緊張	IV 親しい関係内に 限定される会話
拒否不安	.18 *	.30 **	.28 **	
親和傾向	-.60 **	-.36 **	-.31 **	

** : p<.01 * : p<.05

人見知り因子と出生順位との関連

人見知りに関する4つの因子のそれぞれを目的変数、親和動機の「拒否不安」と「親和動機」を説明変数とする重回帰分析を、回答者の出生順位別に行った。結果は、Table 3-1とTable 3-2に示す。

Table 3-1 出生順位別の人見知り因子と親和動機との関連性 (標準偏回帰係数)

親和動機	人見知り因子					
	I 関係開始の 困難さ			II 発言への 消極的姿勢		
	長子	中間子	末子	長子	中間子	末子
拒否不安	.22 †			.33 *		
親和傾向	-.58 **	-.58 *	-.65 **	-.43 **		

** : p<.01 * : p<.05 † : p<.10

Table 3-2 出生順位別の人見知り因子と親和動機との関連性 (標準偏回帰係数)

親和動機	人見知り因子					
	III 人前での 不安・緊張			IV 親しい関係内に 限定される会話		
	長子	中間子	末子	長子	中間子	末子
拒否不安	.30 *					
親和傾向	-.28 †					

* : p<.05 † : p<.10

「関係開始の困難さ」に関し、長子は、親和傾向が低い者ほど関係開始の困難さをより認知していることが見出された。また、拒否不安が高い者ほど関係開始の困難さをより認知している傾向が窺われた。中間子は、拒否不安では関連性が見出されなかったが、親和傾向は負に関連することが見出された。末子では、親和傾向が低い者ほど関係開始の困難さをより認知していることが見出された。

「発言への消極的姿勢」に関しては、長子は、親和傾向が低い者ほど関係開始の困難さをより認知していることが見出された。また、拒否不安が高い者ほど関係開始の困難さをより認知されている傾向が窺われた。中間子と末子では、修正済決定係数は0.02及び0.03となり回帰式の当てはまりは悪いこと、また回帰式の有意性に関する分散分析の結果も有意ではなく、説明力はないと判断された。

「人前での不安・緊張」では、長子は、拒否不安は正の関連があり、親和傾向では負に関連する傾向が見出された。中間子と末子では、修正済決定係数は0.01と0.05となり回帰式の当てはまりは悪いこと、また回帰式の有意性に関する分散分析の結果も有意ではなく、説明力はないと判断された。

そして、「親しい関係内に限定される会話」では、長子は、回帰式の有意性に関する分散分析の結果も有意ではなく、説明力はないと判断された。中間子、末子においても有意な回帰式を見出すことはできなかった。

人見知り因子と出生順位との関連

人見知り尺度の4因子と回答者の出生順位を要因とする2要因混合の分散分析を行った。その結果、4つの因子要因の主効果に有意性が見出された ($F = 71.05$, $df = 3/300$, $p < .01$)。LSD法を用いた多重比較の結果、第1因子「関係開始の困難さ」と第2因子「発言への消極的姿勢」との間に有意差は見出されなかったが、第3因子「人前での不安・緊張」の平均評定値は前二者より高く、第4因子「親しい関係内に限定される会話」は、他のすべての因子よりも高く評定されたことが見出された (各因子の平均評定値: 第1因子2.96, 第2因子2.85, 第3因子3.43, 第4因子4.08)。

考 察

人見知りの構造について

因子分析の結果から、人見知りは「関係開始の困難さ」「発言への消極的姿勢」「人前での不安・緊張」及び「親しい関係内に限定される会話」という4つの因子から構成されることが見出された。人見知りとは、初対面の人と話すことが苦手、自分の考えや意見を言うことが苦手、緊張しやすいといった側面があると予想していたため、「関係開始の困難さ」「発言への消極的姿勢」「人前での不安・緊張」の因子の存在は想定内の範囲であった。しかし、「親しい関係内に限定される会話」の因子の存在は想定外であった。尺度作成の予備調査では、調査協力者には「人見知り」な人物の行動や特徴についての記述を求めた。つまり、「人見知り」を第三者の視点から客観的に捉えることで多様な視点を抽出できたと考えられる。「人見知り」と自称する人物と相互作用を重ねるうちに、一旦親しい関係になると自分を出せる人物という側面、すなわち「親しい人だけの場だと口数が多くなる」「仲良くなると口数が多くなる」という側面を見出すのだと考えられる。

以上の結果を踏まえると、「人見知り」な人の人物像としては、人前での不安や緊張を感じるが故に、対人関係を結ぶのには消極的であり、積極的な発言は控えるが、一旦他者と親しい関係が築くことができる人物像が明らかとなった。

人見知りと親和動機との関連

親和動機の拒否不安も親和傾向もともに高いことが「人見知り」に帰結すると予想したが、結果によれば、人見知りの構成要素である「関係開始の困難さ」「発言への消極的姿勢」「人前での不安・緊張」は、拒否不安が高い者ほど、そして親和傾向が低い者ほど強く認識されていることが見出された。「親しい関係内に限定される会話」に関しては、有

意な関連は見出されなかった。したがって、仮説1は支持されなかった。親和傾向が高いが故に、拒否不安の高さが人見知りと結びつくと予想したが、結果からは単純に拒否不安の強さだけが人見知りと結びついていることが明らかとなった。また、「親しい関係内に限定される会話」については人見知りの因子との間に有意な関連が見出されなかったが、これは親しい関係という前提があることによって、拒否不安や親和傾向との関連が現れにくかったためと考えられる。

人見知りと出生順位との関連

人見知り尺度の4因子と回答者の出生順位を要因とする2要因混合の分散分析を行ったが、回答者の出生順位の主効果及び回答者の出生順位と人見知り尺度の因子間の交互作用は有意ではなかった。このことから、人見知りの傾向に出生順位は関連していないといえる。

しかしながら、重回帰分析からは、次のような知見が得られた。長子は、「関係開始の困難さ」「発言への消極的姿勢」の2つの因子において、親和傾向が低い者ほど高く認知していることが見出された。また、拒否不安が高い者ほどその傾向が窺われた。中間子は「関係開始の困難さ」において親和傾向が負に関連することを除けば、全ての因子において、その有意性を見出すことはできなかった。末子は、「関係開始の困難さ」においては親和傾向が低い者ほどそれを高く認知していることが見出されたが、その他の因子において有意性は見出されなかった。この結果から、人見知りの傾向は長子が最も強く中間子と末子間には差がないと言えるだろう。「中間子や末子に比べ、長子是人見知りの傾向が強いだろう」という仮説2は、概ね支持されたとと言える。出生順位が人見知りの傾向と関連があるとすれば、環境の差が人見知りという性格を形成する要因である可能性が考えられる。

総合考察

今回の研究では、人見知り尺度を作成し、その因子的構造を明らかにした。その結果、「関係開始の困難さ」、「発言への消極的姿勢」、「人前での不安・恐怖」の因子は、人見知りの構成要素であることは予想されたが、人々が抱く人見知りの一側面に「親しい関係内に限定される会話」の因子は新しい知見であった。親和傾向が高い故に拒否不安が生じるだろうという仮説は支持されなかったが、因子分析の結果によるとその可能性は示唆されとも言えるかも知れない。また、人見知りと親和動機と出生順位との関連性について検討を加えた。結果から、拒否不安が強く親和傾向が低い者ほど人見知りの傾向にあること、中間子や末子に比べて長子の方が人見知りの傾向が高い可能性が示唆された。一人っ子の人見知りについての検討が今後の課題として残された。

引用文献

文化庁 (2011). 平成23年度「国語に関する世論調査」の結果の概要 (参照日 2017年1月11日)

- 小此木啓吾 (1980). 笑い・人みしり・秘密—心的現象の精神分析— 創元社
- 杉浦 健 (2000). 2つの親和動機と对人的疎外感との関係：その発達的变化 教育心理学研究, 48, 352-360.